

泥人

趙子昂、名は孟頫、湖州の人なり。宋に仕へて真州司戸參軍となり、宋亡ぶるに及びて、至元二十三年を以て元^に仕へ、五帝の優遇を得て、至治元年卒し、魏國公を追封せらる。書を能くし、畫を善くし、音樂に通じ、詩詞に巧に、文を屬すれば人を動かし、政を爲せば體を得、博學多能、聰明敏慧、まことに世にも稀なる人なりけり。されば世祖忽必烈の爲に詔を草せし時は、忽必烈をして、朕が心の言はんと欲するところの者を得たりと歎賞せしめ、書畫を以て天下に名あるや、天竺の僧をして、千里得^くとして其の筆の跡を求めしむるに至れり。史官の楊載といふもの、孟頫の才は書畫の爲に掩はる、其の書畫を知るものは其の文章を知らず、其の文章を知る者は其の經濟の學を知らずと稱しけるをば、人^が以て知言と爲せりといふ。子昂の才の大なりしこと、知る可し。刑部に至元鈔・中統鈔の事を論じて屈せざりしが如き、秦御衛里を勉め勵まして、丞相桑哥を彈劾せしめしが如き、實に筆墨詞章のみの人ならざるを見はせり。仁宗が孟頫は操履純正と評せるを見れば、才ありしかば、かば、心さまも酬^はからず、又初めて世祖に見えし時、神采煥發して神仙中の人の如くなりしかば、世

祖之を顧みて喜びて、右丞葉李の上に坐せしめたまひぬとなれば、風姿も凡ならずめでたかりしなるべし。才あり、學あり、識あり、徳あり、加ふるに家系も貴く、風采も美く、壽も長く、官も高く、事多き世に在りてさしたる憂きめにも遇はず、死しては斷簡零墨も、松雪齋が筆の迹よと、玉の如く金の如く重んぜられ、生きては一天萬乘の君にも、名をもて呼ばるゝこと無く、字をもて召されけるまでにもてなされたる、此人ほどの福人は、何の代にも稀なり。

かばかりの人なりけれども、其の二朝に仕へける故をもて、後の人或はこれを惜ばず。水戸の藤田東湖は、年若かりし折、子昂の書を學びしが、齡やゝ長けて松雪齋の人となりを知るに及び、孟頫を學びしを悦ばざりしとなり。東湖の書、其の若き頃のは、ほとく趙氏に通じ、後の^のは猶微に松雪のおもかけを留むれども、勁拔の筆致、つとめて文敏に異ならむとするやうに見ゆ。子昂の帖を初より下して學びしといふは、東湖の事としては疑はし。學ばば學ぶべし、棄てば棄つべし、書は心畫なり、水戸の士藤田東湖、恐らくは然ることを爲ざりしならむ。

明末より清の初にわたりて、陽曲の人に、傅山、字は青主、朱衣道人と號せるものあり。青主の世に於けるは、殆ど子昂の世に於けるが如し、たゞ子昂は宋元の間に處り、青主は明清の間に處れるの差あるのみ。青主もまた博學多能の人、醫を善くし、畫に工に、金石篆刻の道にも其の精を極めしといふ。素より書を能くし、大小篆隸より以下精工ならざるは無し。此人嘗て自ら其の書を論じて曰く。

弱冠にして晉唐の人の楷法を學びたりしに、皆骨の能はざりき。松雪の香山の墨蹟を得るに及びて、其の圓轉流麗なるを愛でしが、稍之をまなべば、則ち已に眞を亂るまでになりぬ。已にして乃ち之を愧ぢておもふやう、是たとへば正人君子を學ぶ者は、毎に其の觚稜近づき難きを覺ゆれども、降つて匪人と遊べば、其の日に親むを覺えざるがごとし、此心術壞れて手これに隨ふなりと。これを奉て去りつ。復顔眞卿を學びて曰く、書を學ぶの法、むしろ拙なるも巧なる毋れ、寧醜なるも媚なるなかれ、寧支離なるも輕滑なる毋れ、寧眞率なるも安排する毋れと。青主の意には、子昂の書をば輕薄儇巧の良からぬものの如くに思ひ倣し、學んで其の風に染むことは易けれども、そは惡友に交はるに親み易きと同じく、其の倣ひ易きは、たま／＼其の眞に良きものならぬを證するのみと謂へるなり。朱衣道人の言は、理無きにあらねども、これもまた過ぎたり。子昂の書を匪人に比するは穩妥ならず、松雪の書、豈學び易からんや。松雪もまた晉唐の人を學べるなり、柔媚のところはこれ有るも、未だ遽に目するに旁門邪路を以てすべからず。清の馮鈍吟論じて曰く、趙松雪は古人に出入して、學ばざるところ無し、貫穿し斟酌して、おのづから一家を爲す、當時誠に獨絶たる也。近代李神伯、奴書の論を創めてより後生以て師となすを恥ぢ、甫めて筆を執るを習へば、便ち古人を模倣するを言ふを羞づ、晉唐の舊法、今に於て地を掃へり。松雪は正に是子孫の家法を守る者のみ、之を試るに奴を以てするは、已に過ぎたらずや。たゞ其の立論字形をして流美ならしむるを欲し、又功夫の天資より過ぎたる

より、古人の蕭散廉斷の處に於て、微しく足らずと爲すのみと。鈍吟は書法に博達なり、是蓋し公平の言、穩當の議といふべし。朱衣道人の子昂を斥くるは、是まことは趙氏が二朝に仕へたるを惡みて、顔氏が大節を持せるを喜べるの言のみ。道人は革命の世に際會し、堅苦節を持し、甲午の歲をもて刑に遭はんとし、幾と死して纔に免れ、速に死するの意れるに如かずとなし、仰いで天を視、免して地に畫し、土穴に居るもの、凡そ二十年、天下大に定まりて稍、土穴を出づるに及びても、自ら歎じて、變強蹠駭の骨、而も佔嗶を以て之を朽ちしむ、是則ち吾が血を埋むる千年にして而して碧滅す可からざる者なり、と曰へるほどの人にて、畫を能し文を善せる吾が子の眉をして、日、山に入つて樵采をなさしめしといへるにも、其の恐ろしき氣質の想はるゝ老先生なれば、松雪齋の書を評して、是の如きの言をなせるも怪むに足らずといふべし。逆旅に在りても、子をして夜學せしめ、詰旦に至りて誦を成さざれば杖を興へて警めしといふは、如何ばかり父として嚴なりし人ぞや。又歐陽修の集古錄を評して、吾今にして乃ち此老の眞に書を讀まざりし者なるを知ると曰ひけるは、如何ばかり齒に衣きせぬ介直なりし人ぞや。先づ其の人となりを知りて、而して言の由つて出づるところを思ふべし。

松雪齋の人にあき足らずと思はるゝ所以は、皆其の二朝に仕へしに因ることなるが、此も亦いさゝか察す可き節あるなり。其の宋に仕へしは、父の蔭によりしにて、宋の亡びし時は、子昂年廿七、才を彰はし功を立てんことを欲すべきほどの齡なり。しかるに國命革まりてよりは、家に在りて學に力

め、敢て自ら進みて榮達を求めんとせざりき。元の大に江南の人才を訪ひしは、至元二十三年にして、子昂時に年三十四、程鉅夫といふものに薦められて、起つて世祖には見えしなり。元の武を以て天下を得たるや、其の勢人を得て民を安んぜんと欲したるなるべく、子昂の如きを致さんが爲には、恩威挟み攻めしこと想ひ知る可し。時勢を考察せずして、而して之を責むるは、理は則ち正しくして、議はやゝ苛なり。國亡びて後、身やうやく榮貴なりと雖、絶えて驕滿の態無く、密に愴惻の情有り、子昂の人品、また思ふべし。故に後人邵復孺評して曰く、公は承平王孫を以て、世の變に嬰る、黍離の悲情を忘るゝ能はざる者あり、故に長短句、深く騷人の意度を得たりと。邵氏の言、人情に近し。

然りと雖、孟頫と時を同じうして、劉因、字は夢吉といふものあり。亦至元中に、徴されて承德郎右贊善大夫を授けられしが、母の疾を以て歸り、尋で集賢學士嘉議大夫を以て徴されしも、固辭して出でざりき。子昂を以て夢吉に比するに、夢吉は貞なり。朱衣道人も、また康熙中に、強ひて中書舍人を授けられしが、而も病を以て入つて謝することをせず。竹榻を以て昇き入れられて、強ひて之を掖けて謝せしめらるゝに及び、則ち地に仆れぬ。次日遽に歸り、後世をして或は妄に劉因が輩を以て我に賢れりとせしめば、且死するとも瞑目せず、と歎ぜしかば、聞く者驚き懼れて舌を咋みしといふ。劉夢吉を以て傅青主に比するに、青主さらに貞なり。況んや趙孟頫は宋の太祖十一世の孫にして、宋

亡びて國敵宗仇の元の用をなせるをや。其の爲す所、濟世治民の補ありといふと雖、後の士をして之を薄んぜしむる、亦復人情の然らざる能はざるところならずんばあらず。才の敏や餘有りて、志の貞や足らず、人誰か松雪齋の爲に之を惜まざらん。

子昂の謚を文敏といふ。まことに文敏とはいふべし、文貞、文忠とはいふ可からざるなり。子昂忠貞缺くるあるを以て、或は後人の悦ばざるところとなると雖、一生多福、加ふるに琴瑟の和諧を得るを以てす。まことに天籟を極めるの人といふべし。

子昂の夫人は、管氏、名は道昇、詩を善し、畫を能す。今に至りて吳興の白雀寺の壁に、其の畫ける竹ありて存すといふこと、清人の記に見え、清初の錢牧齋が秋槐集に、管夫人の畫竹、並に松雪公の修竹の賦を書せるを觀て題するの詩も見え、明の鄭長卿、管夫人畫竹石に題するの詩ありて存す。おもふに管夫人の筆、世に猶存するもの稀ならざるべし。

子昂は是の如き佳偶を得たりければ、大官貴人の習として、侍妾あまた蓄へ有つべき國俗の中に在りても、第二房第三房など置かずしかと思はる。此は子昂の人品良きにも因るべく、また一つには夫人の夫の心を失はぬにも因りしなるべし。世に傳ふ。子昂の既に貴くして、翰林學士たりし頃、夫人も年四十を過ぎて、紅香追ふ可からず、翠光また漸衰へければ、如何なる機にかありけむ、松雪も

書齋の旦暮に伴ひて壘を研り、幾を劈く美人を得んことを思ひ、小詞をつくりて夫人に示しける。其の詞に曰く、

我は學士たり、

儂は夫人たり。

豈聞かずや、

陶學士には桃葉・桃根あり、

蘇學士には朝雲・暮雲ありしを。

我便ち多く幾箇の吳姬越女を娶るとも何ぞ過分ならん。

儂の年紀は已に四角を過ぎたるに、

只管に占住するや玉臺の春。

此の小詞を得たる時の心は如何なりけむか知らず、夫人もまた同じやうなる小詞を以て答へけるが、其の詞に曰く、

儂・我儂、

忘熱情多し。

情多き處熱きこと火の如し。

一塊の泥を把つて、

一箇の儂を捻り、

一箇の我を塑り、

咱兩箇を將て一齊に打破し、

水を以て調和し、

再び一箇の儂を捻り、

再び一箇の我を塑るに、

我が泥の中に儂あり、

儂の泥の中に我あり。

儂と生きては一箇の衾を同じうし、

死しては一箇の槨を同じうせん。

松雪此の詞を得て讀み、大に笑ひて止みけるとなり。男女の夫婦となるは、實に兩箇の泥人を破り

て復造るがごとし、我が泥中に偶あり、偶が泥中に我有りの句は、理も有り、情も有り、なつかしみあり、をかしみあり、土偶の譬、執着と解脱と相糾ひ相織れる詞の草には、子昂も笑ふほかは無かりけむとおもしろし。笑ひて止みけるも人品好し。たゞし子昂の詞、今存するところの松雪齋詞には見えず。

管夫人は小燕の人なり。蘇州と嘉興の松江との、土壤相錯はるところに、小燕大燕といふがあり。皆積水の中に在りて、草樹蔚蔚、圍聚して村落を成せば、古詩の句の、氣は蒸す雲夢の澤といへるより其名をや得けんといふ者もあり。子昂が出たる湖州も其處よりは然のみ遠からぬほどなり。子昂は夫人の郷たるの故をもて、其地に往來し、風光愛すべきを觀て、因つて水村の圖を作りしと傳へらる。又夫人の父の爲に樓を造り、管公樓と名づけしといふ。されば子昂が手づから抄せる佛經に、管公樓の朱格を成せる紙を用ゐたるがありとぞ。子昂と管氏と、伉儷の情の極めて篤かりしは、前に擧げたる如くなるが、舞袖といふ妾のありしことも云傳へらる。明の李竹嬾は、夫人の歿して後に公自から置けるかといへり。さらば是公ふたゝび正室を迎へざりしなり。竹嬾は風流の士、詩文、書、畫、皆一家を成す。其地を經しに因りて、前賢の韻事をしのび、水郷の佳景を悦びて、大小燕の圖を爲りしといふ。

子昂の信仰の、孔孟を宗となせしは、言ふまでも無し。而して平正溫和の性質より、儒に依ると雖、また敢て老子を斥けず。其の自から道德經を謹書せるもの、端嚴優麗、小楷の典型として、後人の敬重し臨模するところとなる。また佛教を忌まずして、經論を書寫せること、李氏の言の如し。嘗つて自署して、三教の弟子趙孟頫といふ。三教を併せ奉るもの、元に王羲之あり、明に林兆恩あり。子昂は此等狂妄の人の一家の見を誇るが如きにあらず、たゞ其の寛厚溫敦の人となり、老佛の道も、また佳處の存するあるを觀て、おのづから之を尊信するに至れるならむ。しかも是亦子昂が、介然として特り立ち、岸然として自ら持するの士にあらざるを語るものなり。

管夫人の印に、趙管と刻せるものあり。彼邦の習として、女子は嫁しても夫の姓を冒すこと無し。されば印文應に管氏道昇などあるべし。然るに趙管とあるは、趙氏の管氏の意にて、夫人の心ざま見えていとをかし。たゞし此も亦據るところ無きにはあらず、王羲之の筆道の師たりしことある衛夫人は、李矩といふ人の妻なりしが、夫の姓を合せて李衛と稱せしことあり。管夫人、學あり識あり才あり情あり、乃ち趙管又は魏國夫人趙管などいふ印を用ゐしなり。泥像の中に夫あるのみならず、印文の中、猶夫を擁して放ち去らず。趙管か、管趙か、子昂夫妻、生きては双身の魂をあさなひ、死しては一蓮の坐を共にす。まことにめでたしめでたしといふ可し。

(大正四年七月)